

第一回和議平和研究会会議録

財団法人人間自然科学研究所

第一回 和議平和研究会 会議録

日時 2007 年 1 月 7 日

場所 東京・芝パークホテル

参加者 具 末謨 平和統一連合会長

伊勢桃代 財団法人日本国際連合協会相談役

田代かず子 北朝鮮帰還の日本人妻自由応対実現運動の会事務局長

大脇準一郎 NPO 法人未来構想戦略フォーラム 共同代表

一色 宏 株式会社未来創庵代表取締役

小松昭夫 財団法人人間自然科学研究所理事長・小松電機産業株式会社社長

書記 堀江研次 財団法人人間自然科学研究所研究員

はじめに

2006 年 11 月 21 日、島根県出雲市の出雲大社において開かれた、神有月・和議平和フォーラムにおいて採択された出雲宣言を受け、同年 12 月 8 日に、東京において研究会立ち上げのための下打ち合わせ会を開き、このたび研究会発足のための第一回準備委員会を開催した。

北朝鮮との、①韓国・日本人拉致、②南北離散家族再会、③日本人妻の家族再会、の三つの人権問題と、日本による朝鮮人強制徴用、朝鮮戦争による捕虜帰還、さらには日本海・東海呼称、竹島・独島帰属、歴史認識問題など、あらゆる北朝鮮・韓国・日本間の問題をテーブルにあげ、それを政府・赤十字社・その他機関に所轄を分類し、三カ国が力をあわせ、世界恒久平和の扉を開く役割を果たし、人類の歴史の評価に耐え、他の紛争地域のモデルとなるプロジェクトを遂行できる環境を整えることを目的にする。

要旨

財団法人人間自然科学研究所理事長小松昭夫の発案により、参加者同士で意見を交換。趣旨文が含まれた企画書（案）が具末謨氏、大脇準一郎氏より提案され、事務局の設置が協議された。趣旨書、企画書、計画は継続協議になった。

議論の中で、人権問題を日朝国交回復より優先させることを確認した。南北統一問題は日本に大きな責任があるが、直接的には韓民族（朝鮮民族）の問題であり、三カ国間での自由往来を入れてはどうかとの意見もあった。

会議録

小松

みなさん、あけましておめでとうございます。正月早々ご予約のある中をご参加いただき、誠にありがとうございました。昨年3月に中国、韓国、そしてアメリカから15名の講師パネラーをお招きし、600名の参加を得て松江市く にびきメッセにて平和フォーラムを開催しました。続いて11月21日には出雲大社社務所においてエリ・コーヘン・イスラエル大使と、戦後早くからアメリカから「食を通じて世界平和」の運動を展開されている久司道夫先生を講師に迎え、「神有月・和議平和フォーラム」を開催いたしました。

ここに至るまで20年間、知で社会を改革できる時代が来ることを予感し、事業を営む傍ら人間自然科学研究所を設立し、数々のフォーラムを開催し、近隣諸国にあるたくさんの「戦争と平和記念館」を、団体で訪問・顕花する事業を行い、一昨年の12月8日にはハワイ真珠湾にあるアリゾナ記念館にも40名の団体で訪問・顕花を行ってまいりました。当社の本社所在地・創業の地は、朝鮮半島の対岸に位置し、怨念を超えて平和な国をつかった「國譲り伝説」の出雲大社があります。近くの境港市にある美保基地は本土決戦の最大の基地として7000名の特攻要員が配備されていましたが、人類史上初めて使用された広島原爆によって早く戦争が終わり、戦火を免れたという事実があります。またここは最後の特攻隊長・中津留達雄大尉ゆかりの地でもあります。

これらのことから、この地には戦後責任を果たすことを通じて、人類進化を促し、恒久平和実現の使命があるのではないかとこの想いを抱き、核拡散の時代を迎えた現在、確かな成果につながる具体的な行動をおこすときがきたと認識しています。

大脇

南米のボランティア活動から戻りまして、2001年からいろんな活動をしてまいりました。7年目に入ります。最近、人生の中でこれほど忙しいことはなかった。体を張ってやってまいりましたら、倒れそうなときに小松社長に会いまして、やっぱり志をもってやっている人はいるものだ。西原春夫総長（早稲田大学元総長）もそうですけど、僕は全然お金を持ってないんですけど、やっぱり志を持っている人はいるものだと思いました。未来構想フォーラムというのが出来まして、市民国連ができて、まあ、今後、こうやって生かさせていただいているので、がんばって行きたいと思います。

具先生もそんなに深く知らなかったのですが、昨年いろいろお会いするたびに、本当に南北統一のためにひたすら反戦を掲げてがんばっていらっしゃって、牢屋に入れられて体張ってがんばっているという。刑務所にそのために10年間も入って本当は死刑になるところを、政権が変わったので助かったという。本当に南北統一にがんばっていらっしゃる方。命がけでやっていらっしゃる方が集まれば、変えられるんじゃないかと思います。今年何が出来るかわかりませんが、日本で出来ることをやって、本当に世界に貢献できたらなあというのが、私の余生のすべてです。

田代

はじめまして。小松先生は今日お目にかかって二度目です。詳しく深く存じ上げているわけではないのですが、感激しております。

私に関しましては、約 32 年になりますけれども、姉が北朝鮮に行っている関係で、帰還協定をもとにして戦後朝鮮に渡って行った日本人妻の帰還運動をやっています。池田さん（池田文子・日本人妻自由往来実現運動の会）が代表になりますけど、素晴らしい時代を迎えている。朝鮮半島全体が危険な状態にありますので、平和な世界のために、私たちも一緒になってお手伝いできればと思います。

伊勢

伊勢と申します。本当に、小松社長始め、大脇さんが献身的な努力をなさっていて、その中に入るとするのは、恥ずかしい気がしております。私はずっと国連に 30 年ほどおりまして、いろんな問題に携わり、PKO 人材の養成などに関わって、それから国連大学の立ち上げは、最初からやっております。国連を退職いたしまして、これからは一市民として関わっていけるという思いで日本に帰ってきましたら、アジア女性基金という、いわゆる女性と暴力の問題なんですけれども、その発端が慰安婦問題。この問題のお手伝いをさせていただいておりました。このお手伝いをするに当たっては、ほとんどの方が反対したというのを覚えております。ただ私は国連というところにおりまして、これから大事になる地域社会と離れたところにいました。特に私は本部にいたものですから。これからアジアのことを勉強しなければならないという思いになりまして、アジアを知るのに一番の問題点。突き刺さったとげというものを通して、アジアとの関係を考えるのは大事じゃないかなと思ひまして、引き受けました。8 年間そこにおりましたけれども、アジア女性基金自体は、今年 3 月 31 日で終了いたします。償い事業が終了いたしますので、こういう機関というのは、仕事を終えたら終わるとするのが大事だと思ひまして。そこの中から非常に感じたというのが、一つには、いかに世論というのを動かすのが難しいかということです。

特に日本というのは大半の人が、非常に現状に満足している人が多い。経済復興ということで一つになってまい進してきた日本に、満足している人が多い。そして「考える」ということをあなた任せにして官僚国家をつくってしまつて。福沢諭吉先生が 130 年前に言うておられるんですけれども、「国家があって国民がない」という状態に、そこから民というものが成長していないというのを痛感しました。こうやって市民の運動というものをこれから強くしていけないと、日本は非常に危うい方向に行く。やはり官僚国家というのを何とかして、市民が主権を握るしかない。このような仕事を一生懸命していらっしゃることに尊敬の念を持っております。

具

先ほど大脇さんからお話を伺いましたけれども、私は、残された余生を生きているつもり。すでに 1970 年から 80 年の間 10 年間、81 年に出獄しましたが、その 10 年間で人生が一回終わった。

その 10 年間で描いていた夢は、在日の和合と統一。祖国の平和的統一。そしてそれが基本になって、中国と日本の橋渡しをしながら東北アジアの地域共同体。それを 70 年代から私は夢見ていた。人生の残りを賭けるという思いで今日ここに來ています。

和議平和研究会は、いまおっしゃった市民の世論を変えなきゃいけないときに來ているのではないかと。ほとんど何もしないで平和運動とか統一運動とかやっている人が多い。実際は満足していたり、怖がっていたりして、運動をやっていない。そういう意味での環境づくりが出来ればなあという思いで小松先生にお話した。この出会いは献身的努力をされている大脇先生のおかげです。

土地の使命ということをおっしゃったけども出会いの縁を大切にしながら、今日ここに集まった人たちのことを聞いていると幸せいっぱいな気持ちなんですよ。

「士は己を知る人のために死す」という言葉がありますけれども、私は日本の友人にサムライといわれるのが一番うれしい。韓国の同胞からは脚を引っ張られるかもしれない。もうあることないこと。そんな中で一生懸命階段を昇りました。なぜかというとなが卒業したころから牢獄から出るまでの 60、70 年代の在日には、社会的地位が全然与えられなかった。どんな職業にも就けなかった。そのあと 80 年代になって私が出獄してみたら、弁護士にもなれる。教授にもなれる時代になっていた。

そういう意味で、私が一番、ロマンを求めたけどなにもできない世代で、私の友人たちはみな北に帰っていった。ほとんどの友人は北に帰らざるを得なかった。在日で残った人は何をやったかという、高利貸しか、暴力団か、パチンコか、食堂か。金はもうけたけども理念も何もない。そういう友人たちがぼろぼろと死んでいます。友人たちが死んでいく中で私がやるべきことというのは、離散家族問題、僕の姉さんも北にいますけど。韓国籍の在日が北に行ける。朝鮮籍の人は南に行ける。そういう在日の権利を取らなければいかん。和議の和だけではだめだ。和議の議がなければだめだと聞いたときに、「これだ」と思って、昨年 12 月に韓国ソウルで開催された在外同胞フォーラムで、和議の出雲宣言を強くアピール、説明までして帰ってきたんですが、私が書いたつたない文章でこれから議論をしていただいて、多くの人が感動するような趣旨文を書いてですね、非常に有名な方の賛同を得て、世論化していく。そういう運動が出来ればなあと思って、今日參加しました。よろしくご指導願います。

一色

私はデザインの仕事をしていますけど、シンボルのデザインというのが大半の仕事になっています。一番大事な経営者の中心になる経営理念に何を入れたらいいか。世界をみるとなんでこうなっているかとみると、不信感がこんな世界をつくっているということがわかった。もう一つは慈悲心の欠如。慈悲の「慈」は、友情を表す。「悲」は友が苦しむと、同じように「同苦」する。自分も苦しみ、何とかしたいという気持ちになる。

いろんなことで企業が発展するのも真善美、愛のある、いろんなことに寄与している会社、ほんとうに民衆の要望するものにちゃんと応える企業でなければ発展しません。

やっぱりちゃんとした精神のある会社は大発展する。シンボルが非常におもしろいのは、方向付けてしまう傾向がある。私はずいぶん企業のイメージにハートを使ったのは、「心こそ大切・心こそ第一なり」の金言をメッセージしたかったからです。

(和議のシンボルを示して) 出雲フォーラムに参加したら、こんな形になった。世界全体を眺めてみると、若い人を含めて感じる力が弱くなっている。もう一つは学んで考える力がなくなっている。もう一つは夢を見る力がなくなっている。小学生から金融のことを教えている。銭ゲバになるようなことを教えたらいかん。みずほ銀行なんかそれをやっている。アメリカがそれをやって成功したからといって、子供が大事なのは夢見る力。そういうお金の方向に行くのではなくて。

その源にあるのは愛する力。あと行動する力。ここに勇気がある。そういう全体の力が弱くなっている。それを自分に言い聞かせながら、何年か前に地球市民憲章＝※1＝というのを出しました。尊敬する大島先生(哲学者の大島康正氏)に見せたら「とんでもないことを考えたな」と。怒られるのかと思ったら、「これは面白い。素晴らしいと」(笑)。美しい情緒を持っているのは日本国民だと思っている。どうもこの美しい情緒が新しい時代を作るのではないか。

何かを感じる運動体がなければと思って、微力ではありますが、精一杯努めさせていただきます。よろしくお願いします。



堀江

昨年から人間自然科学研究所の仕事に携わらせていただきました。それまでは島根の地方紙で新聞記者をやっておりました。

その中で非常に大きな問題としてクローズアップされてきたのが竹島の問題でした。『自国の領土』云々と主張するのはいいのですが、それがほとんど国内へのメッセージ。相手は東京ではなくて韓国なので、その方々に対して堂々と主張するのかというと、韓国からその機会を与えられて、「議論しましょう」といわれても逆に逃げてしまう。「領土権の問題は国にある、外交権は国にある」といって逃げてしまう。それに疑問と憤りを感じました。では何のために「竹島の日」を決議したのか。

小松理事長と出会うことが出来まして、「憤るのはいいけれども、この状況で何のために何をするかだ」といわれ、まさしくそうだなと感じました。この状況を最大のチャンスと想い、これをやっておけば、もしかしたら私たちが存命のときに日本と韓国と北朝鮮でこの百年間続いた恩讐を解くことが出来るのではないかと考えています。いろんなご縁でこの研究所におり、そしてここにいます。よろしくお願いいたします。

小松

私がいままで 20 年間こういうことをやってきたのはなんとためかと言いますと、韓国や北朝鮮や中国、アメリカに、こちらが情報発信したときに、聴いてもらえる状況をつくるということ。韓国の釜山でフォーラム（2006 年 10 月 19 日、韓国・釜山において、「釜山銀行」と「木曜学会」の主催による地域経済活性化のための特別講演会が



開催され、小松理事長が「グローバル時代における経営者マインド」というテーマで講演した）を開いた方（ソ・セウク市民時代編集長、木曜学会副会長）が書いた本（市民時代特別号）、これ（文公会報）は韓国の官僚が読まれる雑誌です。（キム・ヒョンチョル元 MBC 監査室長著）。これは日本人が作ったのではなくて、韓国でつくられたということがポイントではないでしょうか。

これからいろんなことをやってくときに、聴いてもらえるベースが出来ているということをご様に伝えたかったのです。まず現状認識と未来の構想の共有化は、話をすればできると思う。しかし納得して考え方が変わり、行動が変わるというところまではなかなか行かない。共感から納得に行くためには、提案者の実績の認知が鍵を握っている。国家間でも、提案者が過去、どういうことをやってきたのかということが鍵になると考えまして、20 年間いろんな活動、団体をつくって、または解散しながら、韓国中国に足跡を作ってきました。

た。そして韓国からこういう雑誌がつくってもらえるようになった。ここで真摯に、お互いが尊重しながら話し合いが出来るステージが出来た。またそれを必要とする時代が来た。北朝鮮の核の問題、拉致の問題を、いわゆるソフトパワーで解決するしかない。もしそれに失敗すれば、核の拡散という最後の引き金を日本が弾いてしまう。ということは人類破滅の問題に火がついてしまう。そういうことではないでしょうか。

(企画書案を朗読)

具

この骨格は小松先生のたたき台の文章をもとに、大脇さんと私が作った。昨日、中野でお会いして、高橋芳雄さん(NPOアジア連邦代表)と、田代さんと話して、また手を加えたのがこれ。私たちの気持ちは良く入っているのだけれども、いわゆる国民が読んで、啓蒙されていない人々が読んで、あるいは識者が読んで、心打たれるような趣旨文でなければならない。だからこれは時間をかけても良く練り上げる必要がある。

一色

和議を。こういう概念がなかったのだから、掘り下げて書かなければならないでしょうね。難しいですね。こういう概念がなかったのですから。

大脇

出雲では、共通理想、共通目的が必要だということ。あと、相手に対して尊敬心が必要だと。

具

小松理事長は和議とはこうだと書いているので、それを加えてはいるのですけれども。

大脇

昨日短時間でですけどね、喫茶店で協議した中で一番問題になったのは、例えば拉致問題には日朝国交回復しかないという想いがあったのですけれども、国交回復後、必ずしも人道問題が解決するとは限らない。国交回復を目的にすると、人道問題解決を目指してきた人の想いを必ずしも反映することはできないということですね。それよりも南北が統一政府になれば、危険性が薄れるわけですよ。韓国をさておいて日本が日朝国交回復をやったら、すごい日韓関係が難しい局面になる。そういうことも踏まえて、(企画書)書いたんですけれども。

具

政治的なことを出来るだけ避けて、平和ということの捉え方ですよ。未来像の共感、納得というか。今日、忌憚のない意見をお聞きたいですね。現状認識です。先ず聞きたいのは、日朝国交正常化というものをここには非常に増えてはいるけれども、そ



のために、それと同時に赤十字社会談をやらないことには前に進まないのではないかと
いう想いが私にはあるんですよ。なぜかという平壤宣言をもう一度確認したいんですよ。
小泉首相が行って、平壤宣言をなさいましたよね。平壤宣言の一番のポイントは、「懸案事
項を解決しよう」と書いてある。懸案事項というのは拉致問題なんですよ。そして、政治
的・文化的・経済的関係を樹立しよう。これは国交回復なんですよ。そしてそれが地域の平
和と安定に大きく寄与するんだと。両首脳は確認した平壤宣言を、国交正常化を早期に実
現するため、あらゆる努力を傾注すると。これが第一ですよ。そのためには諸問題を、諸
問題というのは拉致問題も含むんです。言葉にはしていないけど。そして二番目。これが
一番大事なんですよ。国交正常化交渉において、交渉はしましょうということなんですよ。
私が主張しているのは、昨日もね、交渉しようということは、拉致問題解決にもつながる
んだよということを強調した。国交正常化交渉において第二条は、経済協力の具体的な規
模と内容を誠実に協議するとある。協議しようというのが大事なんです。三番目は、北側
はどういっているかという、日朝は不正常な状態にあった。それは遺憾なことだと。そ
ういう遺憾な問題を再び行わないように、適切な処置を行うことを確認した。それは何か
という、懸案問題については謝って、認めたわけですよ。それを日朝国交正常化のため
の具体的な動きを、山崎拓氏（前自民党副総裁）が北に行くと言われているように、そ
ういう日本政府側の具体的な動きがあるわけです。そういうことについて私は現状認識を、
統一してから北側を支援しようというのが、私には骨子にあるわけですよ。だからそれ
でいいのか、いまの現状認識が非常に危険だと。何とかしないといけないという認識から、
そのためには拉致問題を何とかして国交正常化しないといけないという日本側の立場とね。
平和を研究する会なのに、統一してからとなると、この平和研究会は統一のために何を研
究するのかということになる。具体的に何を研究するんですかということになる。

伊勢

統一の点は伺いたかった点です。非常に複雑な過程を通らなければならないと思うのです
が、北朝鮮は冷戦構造から抜け出していないんですよ。それは核との、武器との関係を
考える一つの構造があって、もう一つは世界中が冷戦構造から抜け出していないのではな
いか。そこから日本がどうやって抜け出すかということだと思うのですが、やはり非核・
平和憲法を持っているというものもあるし、核を持っていない国もある。だから安保理で
はない、安保理とは違う方向で考える、そういう機構を私は国連につくるべきだと思っ
ている。「安保理に入りたい、安保理に入りたい」というが、5カ国とも核をつくり大変な武
器を輸出し輸入し、それと一緒にするのは無理だろうと私はいつも思っているのですけれ
ども、それと対抗するだけの力を持つというのが、やはり日本の非常に大事な役割ではな
いかと。冷戦構造を離れた、21世紀の構造というものの、これがいわゆる、世論の原動力だ
と思う。冷戦の中で、核は爆発しなかったんですよ。そこで犠牲にしてきたのが貧困問
題であり、そういうものを全部犠牲にして核をつくってきた。やはりここで人間の安全な
場所、一人ひとりが夜安心して床につける、そういう本当の共同体をつくらなければなら

ない。

古代東アジア共同体というのは、非常に機能していたんですよ。中国という大きなものがあって、律令制度と言語と宗教があった。そういうものでつくっていく。それじゃあここに欠けているものは何かと言いますと、私はちょっといま、思いつかない。

研究所なのか研究会なのか。

(趣旨書では研究所設立、となっていた)

小松

出雲宣言では入口として「研究会」でやっていこうということになっていますが、やりやすい方法でやればいいと思います。具体的な目標が定まった段階で、研究会の発展的解消をし、新たな組織をつくればいいと思います。

具

当面は研究会で行きましょう。

一色

兵器の開発とかそういうものにどれだけお金が掛かっているのか。もっと文化的なものに。文化の交流があって、称え合う状況。兵器をデザインすれば、どんな素敵なデザインになってもそれはもう、人を殺す道具をデザインすることになる。逆に文化芸術にお金が使われたら、どんなに心豊かなことになるか。覇権主義、覇道の争いの文化、これをやめなければ人類の未来はないと言える。

伊勢

武器に投資するというのは、どん詰まりなんですよ。

一色

私はここで、日本人の普遍的価値は、美しい情緒。それを育んだ文化や伝統と思う。で、文化と学問の創造というのは、日本人は貧しかったが、日本は高貴だった。情緒という言葉は英語にはない。もののあわれ、なんて言葉も英語にはない。環境問題のことで何が起こるか。真善美はカントの哲学にもあるが、西洋は全部「真」から来ている。日本は美善真なんですよ。先ず美しくなければならない。今、未来の子供たちの食べ物を先食いしているような形。対立的な関係を共感的関係に、相互否定的関係から、相互補完的な関係に、本当に互恵的な関係に。和議の精神というのが生きるころだと思う。人類同胞として大きく捉えるという感覚が、どうしてもなければならない。まさに和の力によって、相互恵共栄の、心価向上の秩序づくりに「和議」の精神が生きるであろう。



具

和議の基本であり、本質であるというところを、(趣旨文に)、加える。平和学のポイントを。

一色

まさに和議の平和学が重要なんですね。

田代

日朝、あるいは日中の国交回復というのは、日本と相手国の問題です。南北統一というのは本来なら、日本が申し上げる問題ではないと思います。これは韓半島の主権を持った方々の問題ですから、日本人がとやかく言うことではない。日本が分断されたときに、他の国の人がとやかく言うのはいい気がしない。

ですから本来は日本がいうべきではないと思うんですけど、ただ、歴史的に日本が関わって、願わない分断を起こしたのは日本に原因があるわけですから、過去の歴史性に基づいて、日本が協力、あるいは南北が一つになるためのさまざまな情勢を作り上げる協力をしなければならないだろうと思うのです。けっして日本人が南北に統一すべきだというべきではない。昨日



私が大反対したのは、韓半島が一つになるということが第一条件であると、一つの韓半島という状態に戻ってから国交をいたしましょうというのは、本来の位置に戻っていない韓国あるいは韓半島にとって、南との、もちろん国交を回復しておりますけれども、日朝国交回復というのは、南と、北の、分断を固定化する内容であると。そういうふうな観点を感じるわけです。分断を決定付けるものであると。

韓半島でも、南でも「けっして一つになるべきではない」という方もいらっしゃることを私は知っています。なぜなら、東西ドイツと違って南北の韓半島問題というのは、悲惨なもの、避難民を受け入れるということになるわけですから、喜んでいらっしゃる方もいらっしゃるのでは。民族愛はあっても、現実的に経済的に、非常に危惧している側面はあると思う。ですから日本は、南、北と、それぞれと国交を回復した状態で、何とか一つになるように持っていけばいいじゃないかというのは、果たして正しいことなのだろうかという、そういうものがあって、昨日大変な論議になったのです。

私たちの活動は決して政治活動ではなくて、人道的な活動を中心にやってまいりました。もちろん国会だとか政治家の方々にお力をいただいてまいりましたが、国交問題というのは、はっきりと政治活動です。人道運動ではありません。ですからそういう政治活動には関わらないようにしようとしてきました。ですから日赤を通して、国際赤十字社を通して、国連を通してという、人権的な問題を通して・・・だから簡単にことが運ばなかった

という方もなかにはあります。国交問題を扱ったらもっと早く解決したよとおっしゃった先生もかつてはいらっしゃいました。ですけど「急がば廻れ」で。一番問題の少ない、そして多くの方のご理解が得られる道を選んできたんです。社会党や共産党や、そういう左翼政党の方の中には、国交運動を中心的にやってきた方がどれだけいたか分かりません。30年前は特にそうでした。今はそんなにいらっしゃいませんけど、30年前はほとんどがそうです。マスコミも、政治家も。北朝鮮問題といたら国交問題。国交が回復したらすべてが解決すると、言わない方がいません。そういう中で運動してきたのが私たちの活動です。で、32年、右にも偏せず、左にも偏せず、本当にそういう道に来たんです。32年間。ですから昨日大激論になったんですけれど。ですからショートの手で、近い道で利をあげるのではなく、ことを焦って、本当に大事なものを、もしかして失うものがあるんじゃないかと。

大脇

先ず一色さんがおっしゃっていただいたポイントは、平和の中身を美で見せるというのは非常に重要なポイントだと思うんです。それに僕は賛成なんです。アメリカの正義の押し売りがなぜうまくいかないか。自由とか民主主義は枠組みであって、中身ではない。中身が重要で、愛とか、家族とか、奉仕精神がなければ魅力がない。伊勢先生のおっしゃった中で、ODAを何のために使っているか。結局常任理事国になるために日本はばら撒きしているんですね。向こうも日本の足元をみて、脅してはもらう。もうちょっと高次の、高い見識から、日本が貢献すべきではないか。第三勢力をつくっていくというのは、本当に重要なことだと思います。

具先生がおっしゃったなかで、拉致を捉える中で、(日朝は)戦争状態にあるというのがあるんですね。パルチザン＝※2＝の流れから。ですから拉致というのがあるのは当然だという見方があるんですね。こういう見方は日本の人は気づかないわけですね。統一問題を、どのように統一するか、日本の役割は何なのか。南の人は経済格差がありすぎていけないという人があるということなんですけどもね。やはりそれはどこの一般大衆でもある。北朝鮮、韓国が、ひと目合いたいというのは、人間の情です。ですからそこに当事者でない日本がどう積極的に関われるか。戦争責任も含めてね。貢献を探すべきではないか。北と南の国益の違い。特に韓国の方がいつも国際舞台でおっしゃるのは、私たちを囲む4大スーパーパワー。これにより分断させられているんだということを必ず言われる。中国、ロシア、アメリカ、日本を説得することが必要。世論をそういうところに仕向けるというのが、やはり南北統一のために重要だと思う。

伊勢

もう一つ基本的なところで、和議平和出雲宣言に、共通の目的を具現化するためとあるけれども、アジアほど、違った考え宗教のあるところはない。これがものすごく意味のあることで、キリスト教でまとまってきた西洋と違って。だからそこを、普遍的も大事だが、違いというのをどういう風に見ているのかということをお聞きしたいのです。

大脇

共通の目的を具現化するというのは、平和とか、人権が言われます。宗教では人のために尽くすというのが共通しているのではないですかね。表現は違うかもしれませんが、仁、愛、慈悲・・・思いやりではないですかね。

中庸というの、空という表現もある。一切を裸にしたうえで、バランスを見る。協議というの、ともに認められるような価値観でないといけない。やはり今の世界では独善ではないでしょうか。

具

和議の中の麗しい文章のいくつかは取り入れて、平和学。平和学とは人間の心とか、貧困も含まれる。差別や貧困を無くすることが平和なんだ。和議をPRする。啓蒙するというのが、和議平和学の役割だ。国交正常化の問題も、赤十字会談で拉致問題を別個に切り離すことでうまく廻るんじゃないか。(趣旨文にある)賠償という言葉は経済支援、協力に変えなければいけません。但し平和運動はしないのかと。共通認識がないと、設立して、明確な認識がないことには前に進まない。

大脇

伊勢先生どうですか。民団、朝鮮総連とかいろんな団体が結集して、国際世論で圧力をかけてやるという方法は、どうですか、解決しそうですか。

伊勢

それで解決とまではいきませんが、非常に重要なことですね。

小松

出雲大社の管長(千家達彦管長)から先日、和議という言葉の生まれたいきさつを伺いました。二宮尊徳先生から商売人が、推議という言葉風呂の中で教わった。向かい合って一緒に風呂に入り、真ん中に桶を浮かべて、「桶に触らず自分の方に、桶を近づけなさい」といわれた。商売人が水を手前にかくのですが、桶は動かない。そこで二宮先生が商売人を横にどかせて、手で水を前に押し出すと、桶は風呂の壁にぶつかり、今度は逆に手前に進み出し、ついには先生の手元まで来た。このときおっしゃった言葉が、推議。

管長はこれにヒントを得て、聖徳太子の「和をもって尊しとなす」を組み合わせ、和議という言葉は昭和35年に作られたそうです。辞典に推議は載っていますが、和議は載っていません。

私の解釈ですが、**和議とは「時代と、土地の使命を感じ、対立や矛盾を大局的に捉え、恒久平和につながる共通の目的を具現化するため、察して、お互いに与え合い、パートナーの関係を生み出すこと」。**

伊勢

日本の外交に思うのは、日本の外交官はアジアの感じ方に無関心とすることが非常に多いんです。相手の感じ方考え方に対する思いやり、これがまったく欠如してきているというのが、非常に思うんです。日本の外交を見ていると。

小松

和議の中で一番頂点は、楽しく 持続的に生きられる 世界をつくる という 目的。人類だけは、個と種の持続と、楽しく 持続的に生きる という、二つの 目的を持った 生命体。

他の生命体は「個と種の持続」一つ。ただし、認識は同時にできず、一つしか出来ない。だから 世界を 飢餓と 殺戮が終わった 社会と、終わっていない 社会の、二つに分けて考えないと、共生の社会は見えてこない。

また言葉に感動する人、行動に感動する人、形に感動する人、いろいろなタイプがある。だから 目的と 目標の、論理的整合性を 分かりやすく、文字であるとか、絵であるとか、ビジュアルにする必要がある。

目標が明確になると 実行可能な計画にすることができる。目標が高すぎますと 元気が出ませんので、高い目標の場合は、第一目標、第二目標、第三目標と 段階的にする。入口から第一目標までは 詳細な計画を立てる。計画は細心に、行動は大胆に。第二、第三は、第一目標に近づいたときに、設定すればよいわけです。

平和、環境、健康という 三つの問題を、それぞれ 実行可能な計画に ブレイクダウンする。

大脇

三つのキーワードをいつも言われる。平和と環境と健康。私は長年、ナショナルゴールとかグローバルゴールとかをやってきた中で、やはり平和とか、環境とか、健康とかいう問題、一色さんが強調している問題。真善美の、全身的美に。単に平和ではなく、平和の中身が重要ではないか。意味ある人生とか、いろんな言い方があるのではないか。人間らしさ、精神性、これを強調する言葉が必要だ。環境、健康は関わっているんで、これを一つにするのはどうでしょうか。



伊勢

平和の内容なんですけど、一つ出てこないのが、**人間の記憶の問題。過去にあったもの、ここから逃れられないんです。韓国の方に聞くと、非常に悲惨な過去がある。歴史を若い人に教えなさい**というのと、どうしても**悲惨なものが若い人に伝わる。世界中の平和の問題の一番の根本の問題なんです**。人間がどういう風にものを覚えているか。認識したこと、家族に起こったこと。これをどういう風に解決していくかということが大変なことだと思う。戦争が起こり、4年間続いたとします。ところが、戦争というのは100年間続く。というのは、記憶があるから。だから日本も60年間、間違った記憶で生きて、史実でありながら拒否して生きている人がたくさんいますよね。史実でありながらですよ。そういう記憶の仕方がありますし。旧ユーゴスラビアでは本当に人がどんどん殺された。この記憶をど

うするか。

小松

昇華という言葉があります。これは固体がいきなり気体になる現象をいう、物理の言葉です。液化とか気化は、化けるという言葉を使っている。昇華とは、出展が仏教用語だそうです。怨念、恨み、打算、ということは非論理的なもの。これが固まって収集がつかなくなったとき、連鎖的な害を及ぼす。こうゆう状況になった時に、大きな時代のうねり、地の利。そしてきちっと順序を踏み、段取りをして、自力と情報触媒と他力を使い、啐啄同時（そくたくどうじ）＝※3＝。これを使って感激と感動の連鎖を生み出す。一回このエンジンがかかると次から次へと感激と感動を生み出す永久エンジン。この理論を使ったのが宗教。宗教というのはサイエンスとテクノロジーが発達していない時代に、あるいはそういうことに対して感心が薄い人たちが取り組んでいる場合が多い。逆に追求していくと結局宗教に行ってしまう。だから科学者が、追求していくと結局、神の存在を認めざるを得ないと。

大脇

人間の歴史認識。記憶の問題です

具

恩讐を超えてという表現が入っていますが、小松先生がおっしゃるように、未来志向でいけるかということを考えることが必要ですね。

伊勢

日本が核の歴史を抱えながら、そういうことを忘れましようというのは無理なんです。だからここで被害者の意識になるということが大事だと。チャーチルのいうには、被害者は過去の苦しいことを忘れて、加害者が過去の苦しいこと、やったことを忘れないということが理想的なだけけれども、現実には反対です。加害者は否定するんです悪いことを。もみ消そうとする。そうすると復讐になります。

具

韓国朝鮮動乱がどれだけの苦しみだったか。その苦しみのために 50 年経っても、怨念が統一を妨げた一番の原因なんです。

小松

原爆を落とされ、東京大空襲。それがなぜ日本はアメリカなんだと。それはアメリカと一緒にあって、日本国内はもちろんのこと、世界の自由社会に豊かな環境をつくり上げたからですよ。そうすると怨念よりも、誇りの記憶のほうが残って、相手に対する恨みが消えて



いくのでは。しかしあったことは、決して忘れてはならない。

大脳

日朝国交と、南北統一、どちらが早いという問題。歴史的にも批判されている点もあるように、日中国交回復というのは道義も何もない。バランスオブパワーでやった。

具

恩讐を超えるためにはお互いが助け合って豊かにやること。平和をそういう観点からいろいろ捉えていて。ただ戦争反対することが平和運動ではない。

小松

世界、そして子孫から、信頼と尊敬と感謝を受けるという成果物が生まれれば、結果として朝鮮半島と日本、そして世界の平和へつながる。それは怨念を受けているほうからしか主体的に出来ない。加害者が、使命感から生まれた主体性を持って順序を踏んで時代の風と地の利を活かして動き出さねば、ことは始まらない。

大脳

出雲大社もそう。

小松

菅原道真公の天満宮もそうです。加害者側しか進化させるキャスティングボードは持っていない。

具

加害者である日本人が、関妃暗殺事件＝※4＝のことをほとんど知らない。加害者のほうが、それが出来る。被害者は許せないんですよね。なかなか。

小松

日本は、世界から信頼と尊敬を受ける材料、すなわち怨念の再生産を受けている。材料を活かすことは、加害者の日本人と、被害者である韓国人・北朝鮮人と、情報触媒の役割を果たす在日が、三味一体にならないと、ことは始まりません。

伊勢

そうです。だから本当に日本は誇れる国になれるんですが、それをやっていない。

小松

一方から見ればやっていない。反対から見れば保存してあるとも考えられます。核の拡散という時代になると、最大のチャンスが来たということもできる。

同じ第二次世界大戦の敗戦国であるドイツはヨーロッパの中で生きていくための布石を戦後打ってきた。日本は海洋国家であり、世界の中で生きよう運命付けられている。だけど教科書ではどう教えているかというと、日本は島国で、海に囲まれていると。同じことでも解釈が180度違います。

大脳

歴史では海洋国家は発展しましたよね。イギリスもそうだし。これだけ問題になっている

からこそ、市民運動でないと解決できない。

伊勢

国連加盟 50 周年に関連する会議で、日本語の会議の題名にびっくりしたのが、「民は何をすべきか」と書いてある。私は「たみは何をすべきか」と読んだけど、なんて失礼なのかと思った。外務省はなんて失礼なのかと。

大脇

平成元年で 1 億円の NPO 支援資金ができて、今、ちょっと増やただけで自慢している。外国とは比較にならない。

一色

日本の外交はアフリカでどんなことをやっているか。アフリカは 51 カ国ですが大使館は一つ。その中でどんなことをやっているかという、遊んでいる。地元がやってもらいたいことをやらないで。一人の外交官が一年いるだけで、一億円近くの金がストックされる。

小松

海洋工業国家日本が、どういう役割を果たすなかで世界と共生していくか。国是がない中で、外務省職員は、金銭的には豊かかもしれませんが、哀れな存在ですね。

伊勢

外交官が国際会議にでて、発言することが出来ない。国の中の合意というものがないから。まことに変な発言をしている。これは政治リーダーの責任ですね。

小松

東西冷戦を日本人は簡単に考えている。東西冷戦というのは、やるかやられるかではなく、やったら双方アウトだ。それを 50 年間続けてきたアメリカやロシアが、どういう状況になるのか。その中で能天気になってきた。いまさら北朝鮮の核でおたおたすることなんておかしいじゃないか。私がソ連だったら、東西の決戦が始まれば、一番先に日本を叩く。そうしないと危なくて仕方がない。

知らぬが仏って言葉が昔からある。昨日も、おとといも大丈夫、だから明日も大丈夫だと。だからいまさら（北朝鮮の核を）言うのは、本末転倒だと。おたおたするなど。世界、アジア、日本のために、今すぐやらなければならないことが、あるのではないのでしょうか。

日本が核武装云々というのは、世界の核拡散の引き金を引くということなんですよ。日本だけの問題ではないんですよ。

伊勢

本当にそうですね。

具

核軍縮に持っていかなければならないね。

小松

私はそれも違うと思う。日本は核軍縮を叫べる資格がない。アメリカの核の傘の下にいる。

具

なるほど。

小松

広島の前爆で、あそこでいくら祭典をやってもますます核は増えていく。戦争は戦前責任、戦争責任、戦後責任、この三つで考えないと見えてこないわけです。

伊勢

おっしゃるとおりです。

小松

われわれは戦争をやっていないから、戦争責任はないんです。赤十字の船を沈めたり、これは戦争責任なんです。そのルールはだめだよ。戦争をするときの宣戦布告は、「宣戦布告する—お前正気か—正気だ—じゃあ明日の朝6時だ—それは困る。夕方の6時にしろ—じゃあ中折れで12時ではどうか—OK」。これが私の考える宣戦布告のルール。それから戦争ルールを守れば、後は何でもあり。

人類は現代でも、戦争を否定していません。戦前責任というのは、そういう風にならないように手を打っていく。われわれに今あるのは、戦後責任と、これから起きるかもしれない戦前責任。この二つなんですよ。

具

先ずスケジュールのほうから。大きな道は門がない。大道無門=※5=の道をおっしゃられたから。

小松

いま必要なのは事務局をつくることと私は思うんですけど。もうひとつソフト。形と、理論、その両方を作る。

伊勢

(企画書にある)年間計画で、夏までに国連同意を得るという。これはどういうことでしょうか。

大脇

国連にそういうことを納得してもらうということでは。

伊勢

国連のどこに。国際赤十字社ではないですか。

具

ただ国連が韓国の人がなったものですから。=潘基文(パン・ギムン, Ban Ki-moon, 1944年6月13日-)大韓民国の外交官、政治家、第8代国際連合事務総長=だから市民運動として国連事務総長に仲介をお願いするというのがやることではないか。

伊勢

そうするとこれは国連事務総長ということですよ。やはりどの段階かですね。形が出来た後でしょうか。

具

アナン（国連）事務総長や、カーター（元大統領）とか、日本の人が、あ、あの人の話なら聴く耳をもとうということをして3年前から思っていた。

伊勢

国連協会というものがあり、国連のいろんなことをやっている協会がニューヨークにあります。その会長がハンス・ブリックス＝Hans Blix、1928年6月28日 - はスウェーデンの政治家である。1978年から1981年に掛けてスウェーデン外務省の大臣だった＝という方で、IAEA＝※6＝の委員長だった人。この方が、今、核を持つというのがいかに無意味なことかというのを解説できる方。で、この方が国連協会の総合的な会長をしている。日本側は千さん（千玄室 財団法人 日本国際連合協会会長 茶人）。外務省がいままで担当であったのを、民に移して千さんが本当に活躍してやっておられます。お茶を通じて、和の心を世界に広げておられます。いま国連親善大使でやっておられる。

大脇

日本では千宗室（玄室旧名）さんが大事だと。

伊勢

それも一つですね。

小松

なるほど。私はまったく国連のことは分かりませんが、同時に直接、国連の事務総長、国際赤十字社総裁、日本・韓国・北朝鮮の赤十字社総裁にダイレクトメールでたくさんの賛同者とともに伝えるのも一つの方法ではないでしょうか。その辺は総合的見地から、確かな入口から入るための議論が必要ですね。

文章の内容は論理的に反論の余地がないように組み立て、ソフトパワーとして機能させる必要があります。

核の拡散が現実化したということは、核大国に大きな責任がありますね。核拡散に直面した現在、核大国も対応に苦慮していると思っています。このような現状認識に立てば、プロジェクトに賛同する人が世界中から集まってこられるのでは。ブロードバンドと大旅行時代、そして核拡散に至って、人類の破滅と、恒久平和の、両方の入口の前に立っているのではないのでしょうか。

核は人類の特性上、恒久平和に行くために、必要不可欠なプロセスであったという仮説も成り立ちます。人類は限りなく悪魔にも近づくし、限りなく神にも近づく生命体。こういうプロセスを経て、世界を恒久平和に誘導する役回りが北東アジアに来ているのではないのでしょうか。

伊勢

核を持っていない国を集めて会議をすることは大事だと思うんです。北欧の国々とか。

小松

なるほど。それは良い考えですね。なぜ北欧諸国は核を持つ能力を持ちながら、持たずに

いるのか、いられるのか。その辺を聴けば、良いヒントが得られる可能性がありますね。
ひざを交えた会議と、ネットとの併用は想像以上の相乗効果が期待できますね。

具

ネットの世界平和会議というのも面白いですね。

伊勢

人間は隣同士座って意見を出すのと、ネットで会議するのとでは…ちょっと限界を感じています。

小松

頂上と、一合目、そして入口がはっきりすれば、議論に相乗効果が生まれ、競争と共生が矛盾なく両立し、行動につながる結論に収斂していくでしょう。

伊勢

なるほどね。

(一同、写真集を指差し)

韓国赤十字社の総裁は、韓国の総理？

具

元総理。前々総理ぐらいですね。

小松

韓国から北朝鮮に 500 頭の牛を持っていった、それにあわせたんですよ。今年が南京大虐殺 70 周年なんです。そこでいろんなことが計画されている。私はそこで講演してきました。「中庸」(南京・釜山講演集)に書いてあります。こういうことを、戦略的に税金を払いながらやってきた。何が重要というと、聴いてもらえるということ。世論ではなくて、権力を持っている人に集中的にやって。

韓国、中国、シンガポール、その他アジアの国々はもちろんのこと、アメリカ、オランダにも、日本に対する怨念発電所がたくさん作られてきた。

伊勢

わかります。

小松

今年、南京の記念館は敷地面積三倍、展示面積十倍になります。真珠湾のアリゾナ記念館も今度拡張されるようです。シンガポールもこの間、フォードの工場跡地に、8 億円かけて完成させました。

それを子供たちが見ると「えーっ、こんなことをやってきたの。日本人ってひどいね」というのがどんどん増えるわけですよ、怨念発電所(一同笑)。だとしたらそのエネルギーを感激と感動に作り変える。そうすると逆にそれを作った人も浮かばれるし。「こんな方法があるのか。これはアメリカとイラクでも使えるな」となれば素晴らしい。

大脇

環境もビジネスに、健康もビジネスになった。21 世紀は平和の事業化の時代と考えている

っしゃる。先見の明と 思いますけど。

小松

お金が回る中で、笑顔がどんどん増えていく。これが、景気がいいということ。二宮尊徳先生がおっしゃっているように理念なき経済は罪悪、経済なき理念はたわごと。一家を排して万家を起こす。

朝鮮半島の対岸にあり、広島への原爆投下によって早期戦争終結の恩恵を受けた出雲で、北と南が分かれているこの現実を正面から受け止めれば、日本国出雲、韓国、北朝鮮の三者に、世界恒久平和に向かう歴史的な役割が回ってきたと考えられるのではないのでしょうか。

まず日本国内で市民レベルの勢力が協力し合い、日本と韓国、北朝鮮政府に働きかけて、世界の平和の流れをここから興す。その仲介を国連にお願いする。

具

それが和議平和研究会。

一色

世界の憧れですよ。

具

いわゆる環日本海地域ですね。境港は元山か、清津と姉妹提携していますね。(境港市は、朝鮮民主主義人民共和国元山市と 1992 年姉妹提携。同国核実験表明を受け 2006 年破棄)

小松

今はクローズしています。

具

クローズしていますけどね、出雲も考えないといけないね。

小松

拉致の問題、日本の拉致だけではだめなんです。韓国の拉致と一緒に話をするによって、初めて日本人の義務と責任を果たすことにつながります。それともう一つは、赤十字社になぜ働きかけるのかというと、日本人妻の問題は、赤十字社が絡んでやった問題なんです。

伊勢・田代

そうです。

小松

だとしたら赤十字社には義務と責任があるのではないのでしょうか。私が金正日さんだったら、やれやれ、これで面子が立つ。それと同時に、厄介な問題からやっと開放されると思う。

始めからうまくいくに決っている。演繹法と帰納法と弁証法でちゃんとステージがつくってある。後は遠足に行くようなものです。

だって、おいてあったからちょうど飲み頃になっているんですよ。

一色

本当に視点を変えると、最高のものになっているわけですね。ある面では最高の場が用意されている。

具

日本の携わっている人はみなそう思う。

小松

赤十字社は人道問題に集中し、政府は植民地支配の補償金や、核の問題に集中して取り組み、専門チームをつくり、赤十字社がスムーズな活動ができるよう支援する。

具

（趣旨書を）あわててつくるより、感動させなければならない。

国会議員、経済界、宗教界、マスコミが、これに参加しないと恥ずかしいと思わせるようなものにしないといけないわけです。

田代

北から来ている姉からの手紙はいっぱいあるんですけど、私どもの姉は向こうでも本当に庶民ですから、向こうでの様子は書いてきたことがありません。

一色

やはり検閲される。

田代

もちろん 100%検閲です。切手代が三日分の食事に当たるといいます。これが 1987 年に朝鮮に会いに行ったときの写真です。もうやせて、老婆のような感じでした。本当に（日本とは）状況が違いますので。

最近はテレビでも出されるようになりましたけど。700 人ぐらいの北朝鮮にいる日本人妻の住所を確認しております。救援物資といまして毎年送っております。あちらからはお礼状として手紙が来ております。最近はそういう方がどんどん亡くなっておりまして、その人たちからの子供からの手紙になっております。

小松

ご意見をお聞きしたいのですが、朝鮮統一という言葉は当分の間、目鼻がつくまではおいておいたほうがいいんじゃないかと思います。いろんな思惑が働きますから。逆に二つに分かれている現状をまず肯定をして、分かれている故にいい、それを活かす。平和ということによりリアリティがある。要は、自由な往来を目的にしたらどうかと思うのですが、どうでしょうか。統一ということですと、即政治問題になりますから。

田代

私どもの運動でも、南北統一ということを申し述べたことはございません。それは私たちの問題課題では実はない。名前の通り、自由往来実現の会です。

小松

今、一国で生きられる国は地球上どこにもない。21 世紀は、国家の意味が変わってくると

思う。国益ということが、地球益とイコールになるわけです。ということは世界の平和のために、世界が楽しく持続的に生きられる地球社会をつくるために、その国家はどんな役割を果たすかによって、その国の国民に愛国心が生まれるのでは。

大脇

南北統一も言わない。日朝国交回復も言わない。

一同

言わない。

小松

要は、(拉致、南北離散家族、日本人妻の)この三つの問題を解決する。シンプル。その問題を解決するなかで、自然にその言葉が出てくる。

具

政治はいったん抜いて、赤十字社に三つの問題は移管してやるべきではないかと。自由往来するためには国交正常化しなければならないんじゃないかと。常識だと。

小松

逆に、それ以外の良い方法があったら教えてくださいと問いかけるのはどうでしょうか。非常にシンプルに。

具

ぐっと文章が短くなって、和議のことが入るわけですよ。

小松

全面的に赤十字社ができるように、政府がバックアップすると。そういうことを国連で決議を求める。

具

日本が終戦と同時に、(帰還運動は)外務省と法務省がいわゆる救護政策をとったわけです。表向きは赤十字。だから日本政府にも義務と責任がある。どうあろうと政府を動かさなければならない。政府とか世論を動かすために、国連に働きかける。

小松

だから第一の目標を国連の事務総長にもってくる。

具

そうです。

小松

国連の事務総長は各国に。それで大事なことは順序なんですね。世論を先に出したらだめですよ。政略的に先に文書によって政治家に賛意を求め、競って政治家が賛同するような出番をつくる。そして人道という天略を組み合わせる。

具

和議平和学とはなんなのか。平和学を研究するんだと。

小松

和議平和学の理論構築と、その実証テスト。陽明学の中でいう知行合一。

具

面白い。

小松

だって同じこうしてやるんなら、面白くやらなければ、楽しくないじゃないですか。ですが議論が大切です。議論して、こりゃいいじゃないかということで進めていきましょう。実はちょっとお願いしたいことがあります。日本人妻という婦人の問題があるじゃないですか。そして、いまでも韓国に行きますと従軍慰安婦の方が日本大使館前に座り込みをしている。ですから私はぜひ女性を中心に、男はちょっと引いて、女性を支える。

(全員の期待が伊勢氏に向かう)

一色

お母さんの感覚でやってもらったほうがいい。

伊勢

アジア女性基金ということは、非常な問題がありまして。

具

それは実績としてたいへんに意義があります。そしてこれからです。

小松

朝鮮戦争を朝鮮半島最後の戦争にしようと願い、朝鮮戦争を戦った国、支援した国の、女性の民族服を着た銅像を置く。これを竹島に、独島につくろうと働きかけています。独立記念館にはこれ(太陽の國 IZUMO にある、イメージ図) を天井ぐらいまで引き伸ばしたものが寄付してあります。そういうことをやるための地ならしをやっています。私はどこから調べられても政界、財界、宗教界、距離を置いていますから。そうしないとできない。資本主義、自由主義社会の中で、自由を手に入れることほど難しいことはありません。これが私の実感です。

具

本当にそう思います。

小松

それでうちの社はおもしろおかしくたのしくゆかいに。ああ面白かったで。女性の方たちの会をつくって、それを男性がサポートするのはどうでしょうか。



具

天命ですよ。すばらしい会議でした。

大脇

僕らも応援しますので、ぜひ。アジアに安定した基盤をつくるために。長年の経験というものがありますので。

一色

本当に、すばらしいお話ではなかったでしょうか。ありがとうございました。

(了)



※1

市民による平和活動、市民国連が定める。市民憲章は「宣言」で「我々は地球市民としてのグローバルな視点から、又民間人としての立場から、世界平和の維持と普遍的な人類愛と言う課題に向かって挑戦してゆく」などとうたう。

※ 2

抗日パルチザンとは、戦時に、武装した一般人民によって組織された非正規の戦闘集団。多く正規軍と連携しながら、遊撃隊として活動する。別動隊。

イタリア語の *partigiano* からきたフランス語。もとの意味は党員、仲間。一般には外国軍や国内の反革命軍に対して自発的に武器をとって戦う、正規軍に入っていない遊撃兵のこと。ロシア革命、第2次世界大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争などで活躍、特に独ソ戦中のソ連のパルチザンは有名。

抗日パルチザンは大韓帝国軍の強制解散後、旧韓国軍がゲリラ化したのが始まり。日本統治下の朝鮮満州国境で日本関係施設などを襲撃。その中で故・金日成（元朝鮮民主主義人民共和国主席）は旧ソ連の指導下でパルチザン活動をしていたといわれる。

1937年6月4日、金日成部隊である東北抗日聯軍（連軍）第一路軍第二軍第六師が普

天堡（ポチョンボ）の町に夜襲をかけた事件（普天堡の戦い）を契機に、金日成は抗日パルチザンの英雄として有名となった。国境を越えて朝鮮領内を攻撃して成功した例は稀有だったこと、それが大きく報道されたこと、なにより、日本官憲側が金日成を標的にして「討伐」のための宣伝を行い多額の懸賞金をかけるなどしたことが、金日成を有名にした。

※ 3

啐啄同時とは、禅の言葉。卵の中のヒナ鳥が殻を破ってまさに生まれ出ようとする時、卵の殻を内側から雛がコツコツとつつくことを「啐」といい、ちょうどその時、親鳥が外から殻をコツコツとつつくのを「啄」といいます。雛鳥が内側からつつく「啐」と親鳥が外側からつつく「啄」とによって殻が破れて中から雛鳥が出てくる。

両方が一致して雛が生まれる「機を得て両者相応じる得難い好機」のことを「啐啄同時」という。親鳥の啄が一瞬でもあやまると、中のヒナ鳥の命があぶない、早くてもいけない、遅くてもいけない、まことに大事なそれだけに危険な一瞬であり啐啄は同時でなくてはならない。

※ 3

明成皇后（閔妃）（1851- 1895） 1895 年 10 月 8 日大院君を担ぎ出そうとした勢力により景福宮にて暗殺され、遺体も焼却された（乙未事変、韓国語ではウルミ、俗に「閔妃暗殺事件」とも）。

朝鮮が親露に傾くことに危機感を持った公使・三浦梧楼が暗殺を首謀したという嫌疑がかけられた。外交官が王族を殺害することに関与するという行為に、日本は国際的な非難を恐れ三浦を含む容疑者を召還し、裁判を行った。その結果、首謀と殺害に関して証拠不十分で免訴、釈放された。）その他、捜査の過程で実行者として実名が挙げられた者に安達謙蔵、小早川秀雄、横瀬幸彦、堀口九万、一、堺益太郎、柴四郎、鈴木順見、岡本柳之介、穂積寅九郎、鈴木重元、岡本柳之助、杉村濤、馬屋原務、藤戸与三、村井右宗、馬來政輔、萩原秀次郎、国友重章、菊地謙讓、鈴木順見、中村楯雄、寺崎泰吉（別名 高橋源次）、田中賢道、堺益太郎、横尾勇太郎、藤勝顕、家入嘉吉、木協祐則、平山岩彦らがいる。』

なお、朝鮮政府はこれとは別に李周会(自首)、朴銃、尹錫禹の 3 人とその家族を、三浦らの公判中の同年 10 月 19 日に犯人およびその家族として処刑としている。

閔妃は、微妙なバランス感覚による外交政策を得意にしていたとも言われるが、具体的には大院君への怨念ともいえる確執の政治姿勢で貫かれていた。これらの政策が逆に仇となり大院君に代表される反対派勢力による暗殺を呼び込むことになった。閔妃暗殺後、日本は朝鮮の保護国化政策を進めていくようになる。

※ 4

「大道無門」は、『無門関』の 禅宗無門関(無門慧開の自序)の頃に曰く。「大道無門、千差路有り。此の関を透得せば、乾坤に独歩せん。」に由来している。

「大いなる道に入る門は無いけれども、その門はまたどの路にも通じている。この(無門の)関を透り得たならば、その人は大手をふって大地乾坤を闊歩するであろう。」また、「大道に入る門は無く、到るところが道なれば、無門の関を透過して、あとは天下の一人旅。」の訳がある。(岩波文庫 無門関より)

※ 5

国際原子力機関(こくさいげんしりょくきかん、International Atomic Energy Agency (IAEA))は、原子力の平和利用を促進し、軍事転用されないための保障措置の実施をする国際機関である。2005年度のノーベル平和賞を、エルバラダイ事務局長とともに受賞した。

1957年に創立され、事務局長は、1981年から1997年までハンス・ブリックス、その後はモハメド・エルバラダイ。

2002年のエリトリア、キルギス及びセーシェルの加盟により、加盟国は137ヶ国となった。

.....
南北離散家族 日韓拉致被害者 日本人妻自由往来問題に関する各界からの反応

日 時：2007年1月12日

受 信：人間自然科学研究所

発 信：木曜学会常勤副会長 徐 世旭

題 名：日韓両国の拉致被害者問題の解決案に対する見解

北韓(北朝鮮)が日本と韓国から拉致した両国民は、どんな政治的な理由であれ、考慮なしに無条件で本国に帰るのが人間の道徳的な面から考えて当たり前のことです。

もし、拉致された本人が北韓に残りたいと希望する場合は、自意か他意がわからないので、一応本人を自国に帰し、その後、自ら判断するようにしなければなりません。はっきりと言いますが、拉致行為は許せない野蛮な行為です

どんな価値とも代えられない人生の価値を抹殺し、その家族と周辺に忘れない不幸と恨みをつくったことは人間としてやってはいけない悪行為であります。北韓の野蛮な行

為に対し、韓日政府は相当な忍耐力で説得しながら、国民の帰還のため、気をつけながら努力を尽くしてきました。

にもかかわらず、北韓はいろいろな言い訳をしながらこのことを拒否してきました。そうであるからといって拉致被害者を帰還させる努力を諦めてしまうと、それは人間であることを放棄したことと同様です。

今まで両国政府が注いできた努力はそれなりに評価すべきですが、その結果は暗闇の中の手探りのようで、根本的な改善処方を要求されています。

その処方とは、国連に加盟している国家だけでなく、全人類が取り組んで歴史の不幸を解決すべきです。

ここで国連と国際赤十字の役割がもっとも現実的な処方であると強調したいです。

国際赤十字の組織は北韓にも存在するため、日本、韓国、北韓の赤十字社がより体系的な連帯を強化し、国際赤十字と共同で、問題解決をするための知恵を集め、いろいろな方法と手段を講じないといけません。

「探せば見つかり、門をたたけば開かれる」と聖書に書いている通りに、北韓の暗黒の門を開くべく、赤十字社を先頭に全人類が共にたたけば拉致者に立ちふさがっている門も開くだろうと期待しています

特に、この門を開くためには日本・韓国・北韓の赤十字社が、この拉致問題を専担する特別委員会を設置し、持続的な努力をすることが現段階としてもっとも可能性が高いことではないか考えます。

■徐 世旭の略歴

<以前>

西江大學校哲学科卒業 / Korea Herald 釜山支社長 / カトリック釜山 編集長
地平出版社 代表取締役 / 明るいギャラリー 社長 / 釜山自民団体協議会運営委員長

<現在>

木曜学術会創立(79年)、常勤副会長 / 月刊市民時代編集主幹 / 国際新聞読者委員長
釜山をつくるNGO代表 / 海雲台を愛するNGO代表 / 釜山広域市美術協会 諮問委員
釜山広域市行政憲章 審議委員(現)

日 時： 2007 年1 月15 日

発 信： 韓国・東宇技研株式会社 代表取締役 曹 秀煥

**題 名： 韓国・北朝鮮・日本の国際人権問題に関する見解
(理事長・小松昭夫との対談)**

曹 「日本の徴用、韓国動乱の捕虜帰還、さらに歴史問題があります」

日本と韓国の拉致問題、離散家族、日本人妻の問題。このほかに、韓国から北朝鮮に渡った捕虜、北朝鮮から韓国に行った捕虜。日本に太平洋戦争中に徴用（強制労働）で渡った人の帰還問題があるのではないのでしょうか。

徴用で帰国した人は一部。ほとんどが現地で死ぬか、一部は日本に永住した。そして行方不明の方がたくさんいる。北朝鮮から見ると、日本の徴用に比べれば、拉致は事件ではない。それほど規模が大きく、また悲惨な問題です。

次が韓国動乱のときの捕虜の問題。北の兵隊が南に。韓国の兵隊が北に。それぞれ捕虜になって、その帰還問題があります。李承晩大統領の時代に、一部捕虜の交換があったが、韓国からみれば未帰還の人が、たくさん北朝鮮に渡った。またたくさん北朝鮮の人が韓国に渡った。それが離散家族問題の一部になっています。

また、北朝鮮による韓国漁船の拉致問題もあります。いまごろはないですが、昔は毎週のように新聞に出ていた。それで韓国に戻った人もほとんどない。

日本人で拉致された人はほとんどスパイ教育に使われたでしょう。韓国からも。拉致は韓国国内からの拉致もあるし、海外で旅行やビジネス、留学をしている最中に行われた場合もある。

韓国と北朝鮮は今、韓国動乱の講和条約は結ばれていません。戦争はいったん止まった状態。休戦状態です。そのためあって離散家族の面会が難しい。これも自由に往来できるようにしたい。

さらに韓国、中国、北朝鮮、日本の歴史問題があります。靖国神社参拝の問題に象徴されるように。いろいろある。東海、日本海の呼称問題もあります。

こうした、いろんな懸念を全部、協議のテーブルの上に載せましょう。残らないように。平和をつくる目的のために。

小松

世界の平和を目指して、韓国・北朝鮮・朝鮮半島の対岸にある出雲が、そのモデルを目指す。そのための第一ステップ。日本全体ということでは難しい。この出雲。この地域が世界恒久平和の流れをつくる。ここに世界からこのプロジェクトに関心がある人が集まる。集まるというのは物理的に集まるだけではなく、世界中から意見が集まる。100 年後からみて、「あの時代にいいことをした」と言ってもらえるように。

そして笑顔がどんどん増えてきて、世界の中でいまでも緊張や紛争地帯にある地域もそのモデルをみて、「ああいう風にしたい。自分たちの地域は少し状況が違うからアレンジして」となるように。そうすると、日本韓国はもとより、北朝鮮の人にも大いに誇りが生まれる。

曹 「よいことを言ってもタイミングが大切」

盧武鉉大統領がこの前、日本海を「平和の海」と呼ぶのはどうかと提案したけれど、大きな反発を受けた。時期的にあわなかった。いい発想しても韓国では、盧大統領のやることは遠ざける。良いことを言っていると思いますが、時機が大変に大切です。

日本と韓国、北朝鮮。この海が、いまはものすごく魚を獲ることが難しい。前はたくさんの魚が獲れた時期がある。そのときは EEZ 内でも何とかあった。今は魚が獲れないから争いが起こる。

そして北朝鮮には食べ物がない。その原因もあるが。さらに、山に木がない。

そういう面を指導して。さらに経済問題は、韓国企業は中国や東南アジアに工場を造っていますが、例えば中国は言葉が通じないものですから、中国の朝鮮族に秘書をしてもらわなければなりません。コストアップですね。

北朝鮮に工場を造れば、言葉が通じますし、電気も南から送れます。

ですからいったん、みんなポケットにある問題を全部テーブルに載せることです。これまでの緊張の原因になってきたものを、全部載せるのはどうでしょうか。その上で平和を目的に協議する。その方式が世界の方式になる。

小松 「これまでの材料をすべて、英知を使って人類進化に使う」

長期的、多面的、根源的に考える。環境と健康の問題は、生命創生の根源であるシアノバクテリアから考える。人間社会の問題は人類の誕生から考える。ただそれだけでは毎日のことができませんから、一方では短期的、部分的、表面的に考える。

それと長期的な部分が、論理的に整合性が取れるように、演繹法、帰納法、弁証法を使って答えを導き出す。

福田元首相が提唱した OB サミットで採択された「人間の責任に関する世界宣言」＝※注＝で、「あらゆる財産と富は、正義に則し、人類の進歩のために責任を持って使われなければならない。経済的及び政治的権力は、支配の装具としてではなく。経済的正義と社会的秩序に役立つように使われなければならない」。(第 11 条)とあります。

※注

故・福田赳夫元首相が提唱し、世界の大統領や首相経験者でつくるインターアクション・カウンスル (InterAction Council、通称 OB サミット) は、福田元首相の死を契機に、心の問題、倫理問題に本格的に取り組み始めて、世界人権宣言 50 周年記念に当たる 1998 年の国連総会の場で採択を計画した。

公表された草案に対しては強力に指示する意見が世界中から多数表明された反面、人権

活動家や報道機関などを中心として、人権問題に対する取り組みを弱体化させる、あるいは報道に対する規制を強めることにつながる懸念から強い反対意見も出され、国連総会で討議されることはなかった。しかし現在でも、さまざまな機会を通じてこの宣言を人類共通のものにしていこうとの取り組みがなされている。

一隅を護り、千里を照らす

道の追求は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず

参考のために、このプロジェクトの基本理念と、理念の生まれた経緯を記載した、1999年発行の「太陽の國 IZUMO——地球ユートピアモデル事業——」の、巻頭言と、編集後記をご紹介します。

中庸——偏らざるをこれ中といい、易^かわらざるをこれ庸^{よう}という

中国古典「中庸」より

人間自然科学研究所 所長 小松昭夫

自分が置かれている環境をいったん肯定し、人の縁によって現在の自分があり、自然と歴史の中に活かされていることを自覚。同時に、現実を直視、「人類究極の目的にめざめ、状況に応じ、生かされながら臨機応変に生きる」。これが、私の考える「中庸」です。

ゼロから事業を起ち上げ、今日に至った道のりは、たくさんの方々との出会いと縁の賜物であり、感謝にたえません。と同時に、既得権益の因習の壁を臨機応変に突破していく戦いの連続でもありました。

その人生の途上において、いかに生きるべきかを模索する中から、「天寿が全うでき、楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会の創造」という目的を目指すことが、人類が滅亡から救われるための条件であり、21世紀社会は、この目的に向かって自分の果たすべき役割に目覚めた人たちが共生していく社会であることを見出しました。

その人生の途上において、いかに生きるべきかを模索する中から。「天寿が全うでき、楽しく愉快に持続的に生きられる地球社会の創造」という目的をめざすことが、人類が滅亡から救われるための条件であり、21世紀社会は、この目的に向かって自分の果たすべき役割に目覚めた人たちが共生していく社会であることを見出しました。

人類の歴史は、飢えと殺戮のない社会の創造をめざす過程で、文明・文化の交流・融合による新しい文明・文化の創出（陽）と、戦争による殺戮・破壊（陰）という状況とが繰り返されてきました。

今日、世界は、環境破壊と地域紛争の多発による人類破滅か、共通の目的を見出し地政

学的役割分担と合意形成の中から「天寿が全うでき、楽しく 愉快に持続的に生きられる 地球社会の創造」に向かうか、その分岐点にあります。

世紀末の今こそ、多面的に現状を分析、歴史・地政学に照らし、それぞれの地域の目標を見出すべく、議論の場を設定するときです。さもなければ、現代社会は崩壊しかねません。すでにその兆候はいろいろなところに表れてきています。

山陰地方では若い人たちが地域を去り、人口減少と高齢化社会が急速に進み、企業倒産も急増。島根県は高齢化・死亡率のいずれも日本一になっています。

このような切迫した状況下、政治・行政・学者の議論にとどまらず、企業を含めた市民社会総参加のもとで社会改革のための議論の場を設け、解決の道筋を見出す努力をしなければ、企業・個人の生存すら危ぶまれる「暗黒の 21 世紀」になってしまいます。すでに全国各地で同じような状況が出現しています。

社会心理学者アブラハム・マズローは人間の欲求を生理的欲求、安全欲求、集団欲求、尊厳欲求、自己実現（自己超越実現）欲求という 5 段階で説明しています。未来を拓くためのシナリオは、欲求段階を固定化させる文化（霸道）から、進化を促す文化（王道）への転換なくしては描けません。

人間自然科学研究所は、世紀末の社会問題、環境問題を同時に解決するモデル事業として「心のインフラ整備——人縁・感謝と戦争の歴史記念館」「心の首都（松江市市街地再開発構想）」「ゼロエミッション・小規模理想郷（中海・宍道湖圏域の新構想）」「未来を拓く研究・教育機関」の 4 大プロジェクト構想を提案します。

立案に至るまでには、1988 年、商工会連合会と提携、県内若手経営者 20 名とともに、創業の地・島根県八雲村において「知革塾」をスタートさせたのを皮切りに、95 ページの年表の通りの活動を積み重ね、また、森清著「母なる中海」（97 年ダイヤモンド社刊）に記されているような経緯を経てきました。89 年協同組合「テクノくにびき」設立、94 年「人間自然科学研究所」設立、出版活動とシンポジウムを通じた「一村一志運動」展開、94・95・97 年の 3 回に及ぶ「縁むすび大会」（300～500 名参加）開催、「中海本庄鉦区の未来構想発表会」をはじめとするシンポジウム開催などです。

こうした活動を通じて、古くから「縁むすびの国」といわれてきた出雲には、地政学的・歴史的に考えたとき、行き詰まった社会を希望の持てる社会へ誘導する役割があるのではと気づき、4 大プロジェクトの立案に着手しました。

この提案が一つの景気となって議論の輪が広がり、研究・構想・調査・企画・設計・建設・運営というプロセスの中で、本構想の理念に共感する人々のネットワークが構築され、21 世紀の国際共生社会への扉が開かれることを確信しています。読者諸兄のご意見・ご教示をたまわりたく、ご一報をお待ちしております。

後 記

1998 年 2 月初旬のある朝——東京芝のホテルの喫茶室で、小松昭夫氏を 4 人の有志が囲んでいました。小松氏のほかは、みな一様に疲れ果てた顔をしていました。前日からホテルに泊まり込み、延々 6 時間に及んで議論を重ねていたからです。今、われわれはどんな危機に直面しているのか。これがテーマでした。

民族・宗教・地域・国家間の武力紛争、テロリズム、地球温暖化、オゾン層破壊、森林破壊、酸性雨、砂漠化、環境ホルモンなどの環境問題、人口爆発と食糧危機、資源・エネルギー危機、通貨・金融危機と世界恐慌、日韓・日中の歴史問題、朝鮮半島情勢、財政破綻、不良債権、貸し渋りと企業倒産、政治家・官僚の汚職の蔓延、司法の腐敗、少子・高齢化問題、地方都市と農村の後輩、子供の凶悪犯罪等々……私がノートに書きとめた世界の危機、アジアの危機、日本の危機は 100 項目に及ぼうとしていました。自分たちがいかに閉塞の時代に生きているかを改めて痛感し、翌朝は絶望的な気分に戻っていました。

ひとり元気を保っていた小松氏が言いました。「ゆうべ議論した問題を解決する糸口を見出すプランをまとめよう」。みな一瞬、あっけにとられました。膨大な問題点をどう整理し、どんな対策を考え出そうというのか。一同のそんな胸中を察したのか、「大丈夫、2 時間もあればまとまる」と小松氏は言いました。「私が 10 年かけて構想を練ってきたプロジェクトが 4 つある。各項目に番号をつけて、どのプロジェクトがその解決策になり得るか、割り振ってみよう」。みなは呆然としたまま、小松氏の提案にしたがって作業を始めました。すると、あらゆる危機が 4 つのプロジェクトにすっぽりと納まってしまったのです。本当に 2 時間もかかりませんでした。「じゃあ、今度は企画書にまとめる相談をしよう。まず……」言いかけた小松氏を、私はさえぎりました。「わかりました。よくわかりました。これから先は、私にやらせてください。私の役割がなくなります」。

「太陽の國出雲——地球ユートピアモデル事業——」構想を文章をまとめる作業が、こうして始まりました。

(人間自然科学研究所 交易場修)